

層雲

荻原井泉水 主宰

全四七卷全二〇回配本

第一期「明治・大正期」一九二二年～一九二七年

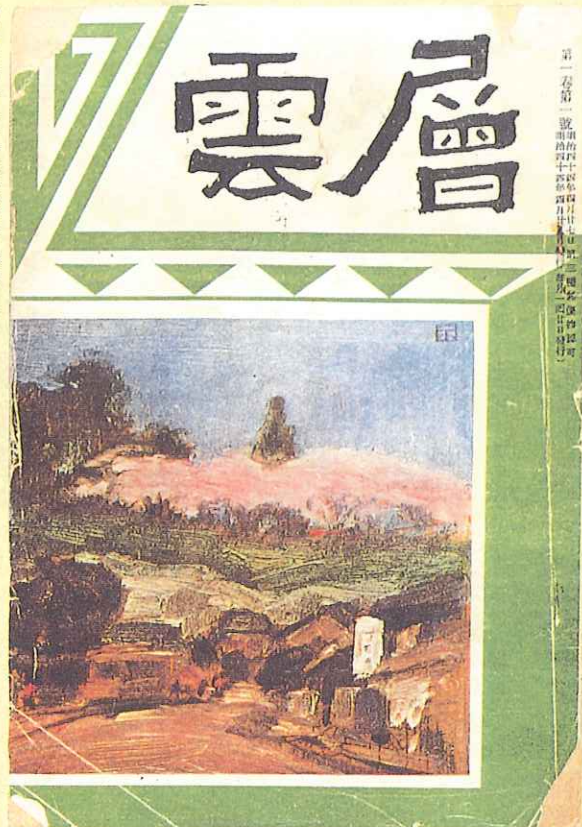
A5判上製クロス装 総一七八七三ページ

本体揃価格 七五万二〇〇〇円（税別）

一九九六年六月

配本開始！

不出版



●創刊号 一九一一年（明治四四）四月号

層雲



十月號

●一九二〇年（大正九）一〇月号

季語無用・定型破壊の自由律俳句の牙城、

荻原井泉水の俳句雑誌『層雲』。

カ
イ
子

尾崎放哉・種田山頭火・栗林三石路などを輩出した

近代俳句史上の重要文献の復刻！

復刻にあたって

❖ 本誌は、形式をきらい、内在的・主観的立場から句を生み出すために、季語無用・定型破壊を掲げた自由律俳句の舞台となった。萩原井泉水発行の俳句雑誌である。

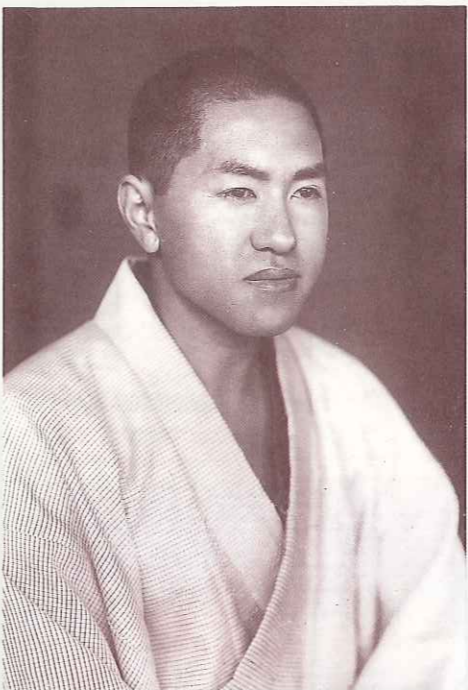
❖ 本誌は、一九二一年、新傾向運動の河東碧梧桐を戴き、大須賀乙字・安斎桜磯子らとともに創刊された。初期の本誌は、「狭くて雑多な花畑」と井泉水自身がいうように翻訳・散文・俳句・俳論・俳話・詩歌・小品・ドイツ文学を中心とした紹介などがひしめき、石川啄木・阿部次郎・久米正雄・岡本一平などが作品を掲載した。

❖ 一九一四年、季題無用論を説く井泉水が、本誌に「昇る日待つ間」を発表して新傾向句を批判すると、碧梧桐は本誌を離れ、以後井泉水の主宰となる。

❖ 碧梧桐一門の人々が去ったあと、若い作家を中心に新しい俳句、すなわち自由律俳句が発展、本誌はまさに自由律俳句の牙城となった。本誌で輩出した俳句作家には野村朱鱗洞・芹田鳳車・尾崎放哉・種田山頭火・栗林一石路などがある。

❖ 近代文学史上、また近代俳句史上、重要な位置を占める本誌を復刻し、研究機関・研究諸氏に呈するものである。

萩原井泉水 一九二〇（大正）年—二三年頃



尾崎放哉（一八八五—一九二〇）



萩原井泉水（一八四一—一九七六）

室上老著作の七十年



井泉水晩年の自画像

東京に生まれる。本名・藤吉。

一九〇五年頃、河東碧梧桐の新傾向運動に共鳴、参加。このとき俳号を井泉水に改める。一二年、新傾向運動の機関誌として碧梧桐と『層雲』を創刊。二年以後、季題無用論を主張したため、碧梧桐との論争が起こり、井泉水は「新傾向句は生活に近づいてはいるが句の魂である光と力に欠けている」と批判、印象的・象徴的で自由な表現として自由律俳句を推進した。碧梧桐が去ったあと戦後没年まで『層雲』を主宰。北原白秋との詩と自由律俳句の境界についての論争など、自由律俳句の理論づけと実践を精力的におこなった。著書は二〇〇余に及ぶ。

『層雲』頌

金子兜太

（かねこ・とうた 俳人）

❖ 『層雲』は、俳句界における『白樺』だった。創刊が一年後れたことも奇しき因縁だが、ともに理想主義を標榜し、『白樺』は自然主義に抗しつつ人道主義の傾向にむかい、『層雲』は河東碧梧桐の新傾向俳句を深めつつ宗教的心境主義の道をすすめた。明治四四年における『層雲』の出現は、俳壇現象の域を超えていたのである。

❖ 『層雲』が「自己表現」を徹底させていったのは、したがって当然だった。主宰萩原井泉水の、「我々は俳句形式に捉はれずして、其精神を逸してゐた」という立言は有名だが、ここから、季題制度を否定し、自由律を唱えるにいたる。同時代に、「有季定型」を掲げて、『ホトトギス』を主宰し、それを拡大していった高浜虚子とは、まったく対蹠的な立場に立っていたのである。

❖ そのこと、大正から昭和前期（大戦終了迄）の俳句界は、『層雲』と『ホトトギス』の、俳句観の完全に対立する二誌の併走の時代といえる。昭和前期に活潑だった新興俳句運動も、『層雲』ほどの鮮明さはなかった。

❖ 対立併走の二誌を軸に俳壇は活気を呈し、両誌ともに優れた俳人を生んだ。『層雲』の、放浪俳人・種田山頭火・尾崎放哉は、いまでも著名である。ここを離れてプロレタリア俳句の道を歩いた、栗林一石路・橋本夢道を知る人も多い。そして、『層雲』のこうした俳句界への顕著な貢献は、いまでも十分に生きている。



萩原井泉水と種田山頭火 一九三〇（昭和八年）一月三日

自由律俳人の野党性

佐佐木幸綱

（ささき・ゆきつな 歌人・早稲田大学教授）

❖ 俳句史および短歌史においては、近代になってからも文語定型が主流を形成してきた。そうした中で、果敢に自由律の俳句・短歌を実践する運動が展開された。短歌の方で早いものでは、石川啄木、土岐哀果（善麿）が企画し、啄木の死後発刊された『生活と芸術』を思い出すが、これは三年しか続かなかった。俳句の方では『層雲』があった。こちらは河東碧梧桐から萩原井泉水に引き継がれ、尾崎放哉、種田山頭火、栗林一石路といった私たちにもなじみ深い自由律俳人たちを輩出した。

❖ 私が出たことがある俳人では、橋本夢道氏が、大正末から昭和初めまで『層雲』にいたはずである。

❖ 文語定型が主流だったから、自由律の俳人たちは、みな、どこか野党の雰囲気をもっている。そこがいい。このたび明治・大正期の『層雲』が復刊されるそうである。自由律俳人たちの野党性を、実際の雑誌によつてたしかめることができるようになるのが嬉しい。

夢の誌面

坪内稔典

（つばうち・としのり 俳人・京都教育大学教授）

❖ 何年も前から、『層雲』全巻を通読したい、と思っている。それもじつくり。この度の『層雲』の復刻は絶好のその機会。うれしい。『層雲』を読みたい理由はいくつかあるが、その第一は、自由律の詩的精神に直に触れたいこと。大正期の『層雲』ではじまった自由律は、個人の内面の自由を俳句において徹底して追求したものであり、定型や約束としての季語はその自由を制約するものとして否定された。個人の自由の実現が最大の課題であった近代において、自由律はいわば過激、純粹に求められた近代の夢そのものであった。

❖ 実際、自由律の時代は夢のように過ぎた。野村朱鱗洞、芹田鳳車、大橋裸木、尾崎放哉、種田山頭火などの多彩な作者が活躍した自由律は、大正から昭和にかけて時代の詩的精神を担って流行した。その精神は、『白樺』や『赤い鳥』、北原白秋、萩原朝太郎、芥川龍之介などにも共通していた。だが、今ではそれは過去になり、

空を歩む朗々と月ひとり 井泉水

入れものが無い両手で受ける 放哉

翌からは禁酒の酒がこぼれる 井泉水（放哉送別）

分け入つても分け入つても青い山 山頭火



萩原井泉水と種田山頭火 一九三〇昭和八年一月三日

標榜し、『白樺』は自然主義に抗しつづつ人道主義の傾向にむかい、『層雲』は河東碧梧桐の新傾向俳句を深めつつ宗教的心境主義の道をすすめた。明治四四年における『層雲』の出現は、俳壇現象の域を超えていたのである。

❖『層雲』が「自己」表現を徹底させていったのは、したがって当然だった。主宰萩原井泉水の、「我々は俳句形式に捉はれすぎて、其精神を逸してゐた」という立言は有名だが、ここから、季題制度を否定し、自由律を唱えるにいたる。同時代に、「有季定型」を掲げて、『ホトトギス』を主宰し、それを拡大していった高浜虚子とは、まったく対蹠的な立場に立っていたのである。

❖そのこと、大正から昭和前期（大戦終了迄）の俳句界は、『層雲』と『ホトトギス』の、俳句観の完全に対立する二誌の併走の時代といえる。昭和前期に活潑だった新興俳句運動も、『層雲』ほどの鮮明さはなかった。

❖対立併走の二誌を軸に俳壇は活気を呈し、両誌ともに優れた俳人を生んだ。『層雲』の、放浪俳人・種田山頭火・尾崎放哉は、いまでも著名である。ここを離れてプロレタリア俳句の道を歩いた、栗林一石路・橋本夢道を知る人も多い。そして、『層雲』のこうした俳句界への顕著な貢献は、いまでも十分に生きている。

自由律俳人の野党性 佐佐木幸綱

（佐々木・ゆきつな 歌人・早稲田大学教授）

❖俳句史および短歌史においては、近代になってからも文語定型が主流を形成してきた。そうした中で、果敢に自由律の俳句・短歌を実践する運動が展開された。短歌の方で早いものでは、石川啄木、土岐哀果（善麿）が企画し、啄木の死後発刊された『生活と芸術』を思い出すが、これは三年しか続かなかった。俳句の方では『層雲』があった。こちらは河東碧梧桐から萩原井泉水に引き継がれ、尾崎放哉、種田山頭火、栗林一石路といった私たちにもなじみ深い自由律俳人たちを輩出した。

❖私が出たことがある俳人では、橋本夢道氏が、大正末から昭和初めまで『層雲』にいたはずである。

❖文語定型が主流だったから、自由律の俳人たちは、みな、どこか野党的な雰囲気をもっている。そこがいい。このたび明治・大正期の『層雲』が復刊されるそうである。自由律俳人たちの野党性を、実際の雑誌によってたしかめることができるようになるのが嬉しい。

夢の誌面 坪内稔典

（坪内・しんり 俳人・京都警備大学教授）

❖何年も前から、『層雲』全巻を通読したい、と思っている。それもじっくり。この度の『層雲』の復刻は絶好のその機会。うれしい。『層雲』を読みたい理由はいくつがあるが、その第一は、自由律の詩的精神に直に触れたいこと。大正期の『層雲』ではじまった自由律は、個人の内面の自由を俳句において徹底して追求したものであり、定型や約束としての季語はその自由を制約するものとして否定された。個人の自由の実現が最大の課題であった近代において、自由律はいわば過激、純粹に求められた近代の夢そのものであった。

❖実際、自由律の時代は夢のように過ぎた。野村朱鱗洞、芹田鳳車、大橋裸木、尾崎放哉、種田山頭火などの多彩な作者が活躍した自由律は、大正から昭和にかけて時代の詩的精神を担って流行した。その精神は、『白樺』や『赤い鳥』、北原白秋、萩原朔太郎、芥川龍之介などにも共通していた。だが、今ではそれは過去になり、放哉と山頭火がその特異な生涯において注目されているばかり。

❖だが、自由の追求は、今なお詩歌における最大の課題。もしかしたら、『層雲』の誌面には、未発の夢がまだまだひそんでいるかもしれない。

層雲

空を歩む朗々と月ひとり 井泉水
入れものが無い両手で受ける 放哉
翌からは禁酒の酒がこぼれる 井泉水（放哉送別）
分け入つても分け入つても青い山 山頭火

近代俳句の創始者 萩原井泉水

夏石番矢

（なつし・ばんや 明治大学教授・現代俳句協会常任幹事）

❖俳句の近代は、正岡子規たちの『ホトトギス』によって始まったのではない。初期の『ホトトギス』は、近世俳諧の整理をし、近代俳句のおぼつかない実験に手を染めたにとどまる。

❖本格的な近代俳句は、正確には萩原井泉水たちの『層雲』によって始まったのである。

❖私が『層雲』に出会ったのは、比較文学比較文化専攻の大学院生時代。芳賀徹東大教授（当時）の、大正時代の日本文化を検証する授業のレポートを書くときだった。今からもう一六年前ぐらいだろうか。ゲーテやシラーなどのドイツ文学に傾倒した萩原井泉水が、熱っぽくそれらの翻訳紹介をし、さらにはアメリカのウォルト・ホイットマンへの関心を示しているところに、大きな驚きと感動を覚えたことは忘れられない思い出。また、『層雲』のリーダー萩原井泉水の俳人としての、視野の広さと人格のあたたかさも、誌面を通じて伝わってきた。

❖アウトロー俳人の尾崎放哉や種田山頭火は、萩原井泉水の『層雲』という大きなふところがあってはじめて出現しえたのである。

❖大変動期を迎えた二〇世紀末に、この世紀の前半の俳句を突き動かしてきた『層雲』が復刻されることは、よろこばしく、また適切な出版活動だと思つた。

近代俳句史の第一級資料 山下一海

（かみした・かずみ 鶴見大学教授）

❖大正から昭和にかけての俳句史を大観すれば、有季定型を遵守する高浜虚子の『ホトトギス』と、季題と定型を揚棄した萩原井泉水の『層雲』が、両翼をなしている。従来の近代俳句史の記述はやや有季定型に厚く、自由律俳句の運動の過程にみられるさまざまな劇は、かならずしもよくは知られていない。

❖このたびの『層雲』の復刻によって、だれでもが自由律俳句という一つの新たな文芸様式誕生と生成のライブ状況を、まのあたりに見ることができるようになる。主宰者井泉水が近代俳句における一巨人であったことも、はつきりと見てとれるだろう。自己に正直な生き方によって現代人の心をそそる尾崎放哉や種田山頭火出現の機微も、そこに窺うことができよう。また伝統俳句のさまざまな問題も、『層雲』の側から照射することによって、鮮明に浮かび上がることがあるはずである。さらに『ホトトギス』が一時期そうであったように、『層雲』もその初期においては、単なる俳句雑誌ではなく、総合文芸雑誌、さらには総合芸術雑誌の観があり、豪華な執筆陣を擁して、色彩豊かな大正文化の文様を描きだしていた。

❖『層雲』は近代俳句史の第一級資料であるのみならず、近代文化史研究のための基本資料となるものである。今回のこの企画は大いに称えられなければならない。

弱者の手帳より

山 頭 火

(二十二)

昇る日を待つ間

井 泉 水

○私は最近の傾向にある俳句を愛し、又その作者に敬意を表してゐる。然しながら、今日の俳句を以て満足することは出来ない、又完成したものだと思ふことは出来ない。

○今日の俳句は更に一段の向上を要する。俳句は僅かにその少年期を終へたばかりである。眞の藝術たる俳句として、一人前になるのは是からである。

○最近の傾向にある句には空気が出てゐる事、気分が出てゐる事、それは既に指摘した所である。然しながら、其上になほ或る物がなければならぬ。

○その或る物とは何であるか。

○曰く 光 である。

○曰く 力 である。

○空気が気分の出でゐるだけの句は、豊富なる経験と季語の使用に熟してゐる俳人諸子によつて、むしろ容易に製作せられてゐる如く見える。我々は所謂こしらへ物を排してゐるが、それは常に下手にこしらへられたる作品が難せられるので、上手にこしらへられたるものは却つて賞せられる観がある。斯の如くんばこしらへ物の論は遂に徹底する時がない。

○けれども私が望む所の、光のある句、力のある句は、如何にするとこしらへ物といふ風にして作る

初めて融けるものである。
の力がある。その闇の力を握れ、
はおのづから苦痛の福音を宣傳
い。

欺く、それよりも腰々正直とい
く。
であるやうに、誇張は弱者の避

と思ふ人があるならば、その人
い人である。人間の心は底のな

●一九二〇年(大正九年)二月号



●本カタログ中の表示価格は
全て消費税を含んでおりません。
●弊社は注文制です。
お近くの書店にご注文ください。

不出版(株)
〒113 東京都文京区向丘1-2-12
電話(03)3812-4433
フクニリ(03)3812-4464
振替001600-2940804

層雲

第一期全47巻
〔復刻版概要〕

【体裁】
A5判上製クロス装綴二万八千七百三十二ページ
【本体価格】
七万五千元
【配本】
第二回配本 三万二千元
第二回配本 各八万円

金子兜太 佐佐木幸綱 坪内稔典 夏石番矢 山下一海

●配本 ●復刻版巻数 ●原本巻数 ●原本発行年月

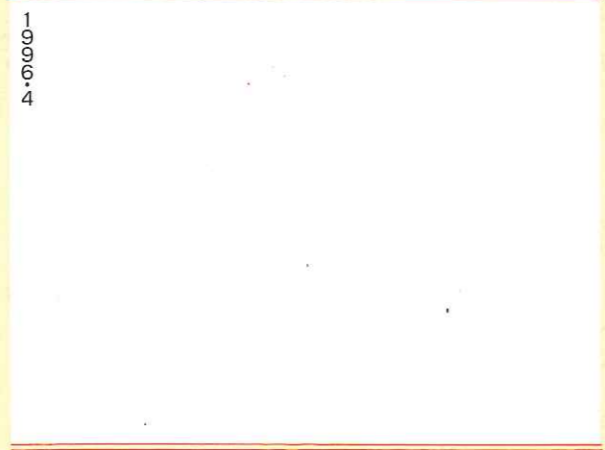
| | | |
|------|------------------------|----------------|
| 第1回 | 第1~2巻(第1巻1号~1巻8号) | 明治44年4月~12月 |
| 第2回 | 第3~7巻(第1巻9号~3巻4号) | 明治45年1月~大正2年7月 |
| 第3回 | 第8~12巻(第3巻5号~4巻12号) | 大正2年8月~4年3月 |
| 第4回 | 第13~17巻(第5巻1号~6巻8号) | 大正4年4月~5年11月 |
| 第5回 | 第18~22巻(第6巻9号~8巻4号) | 大正5年12月~7年7月 |
| 第6回 | 第23~27巻(第8巻5号~9巻12号) | 大正7年8月~9年3月 |
| 第7回 | 第28~32巻(第10巻1号~11巻12号) | 大正9年5月~11年3月 |
| 第8回 | 第33~37巻(第12巻1号~13巻7号) | 大正11年4月~12年11月 |
| 第9回 | 第38~42巻(第13巻8号~15巻4号) | 大正12年12月~14年8月 |
| 第10回 | 第43~47巻(第15巻5号~16巻12号) | 大正14年9月~昭和2年4月 |

●配本年月 ●本体価格 ●年度別価格

| | | | |
|---------|---------|------|---------|
| 一九一六年六月 | 三万二〇〇〇円 | 九六年度 | 一九九二〇〇円 |
| 九月 | 八万円 | 九七年度 | 二四万円 |
| 二月 | 八万円 | 九八年度 | 二四万円 |
| 九月 | 八万円 | 九九年度 | 八万円 |
| 二月 | 八万円 | | |

●年度別価格
九六年度 一九九二〇〇円
九七年度 二四万円
九八年度 二四万円
九九年度 八万円

本体価格 七万五千元



層雲

荻原井泉水 主筆

全五〇巻全一〇回配本

第II期「昭和戦前期」一九二七年～一九四四年

AS判上製クロス装 総二万ページ

揃定価 九〇万円十税

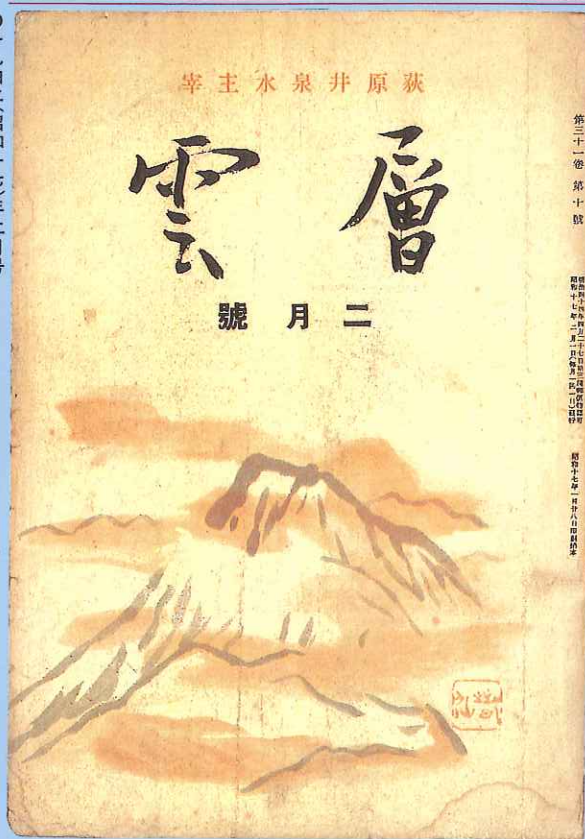
一九九九年九月

配本開始!

不出版



●一九二九(昭和四年)年十一月号



●一九四二(昭和一七)年二月号

季語無用・定型破壊の自由律俳句の牙城

荻原井泉水の俳句雑誌『層雲』。

種田山頭火・栗林三石路などを輩出した

近代俳句史上の重要文献の復刻!

井泉水

復刻にあたって

◆本誌は、形式をきらい、内在的・主観的立場から句を生み出すために、季語無用・定型破壊を掲げた自由律俳句の舞台となった、荻原井泉水発行の俳句雑誌である。

◆一九一一年、新傾向運動の河東碧梧桐を戴き、創刊された本誌は、

初期には翻訳・散文・俳句・俳論・俳話・詩歌・小品・ドイツ文学を中心とした紹介などがひしめき、石川啄木・阿部次郎・久米正雄・岡本一平等が作品を掲載した。

一九一四年、季題無用論を説く井泉水が、本誌に「昇る日待つ間」を発表して新傾向句を批判すると、碧梧桐は本誌を離れ、以後井泉水の主宰となる。

◆碧梧桐一門の人々が去ったあと、若い作家を中心に新しい俳句、すなわち自由律俳句が発展、本誌はまさに自由律俳句の牙城となった。本誌で輩出した俳句作家には、

種田山頭火・小沢武二・大橋樫木・青木此君楼らがあり、昭和期には、

栗林一石路らがプロレタリア俳句運動をおこした。

◆近代文学史上、また近代俳句史上、重要な位置を占める本誌を復刻し、研究機関・研究諸氏に呈するものである。

荻原井泉水七十年



井泉水晩年の自画像

東京に生まれる。本名・藤吉。

一九〇五年頃、河東碧梧桐の新傾向運動に共鳴、参加。

このとき俳号を井泉水に改める。一二年、新傾向運動の機関誌として碧梧桐と『層雲』を創刊。二年以後、

季題無用論を主張したため、碧梧桐との論争が起り、

井泉水は「新傾向句は生活に近づいてはいるが句の魂である

光と力に欠けている」と批判、印象的・象徴的で自由な

表現として自由律俳句を推進した。碧梧桐が去ったあと

戦後没年まで『層雲』を主宰。北原白秋との詩と自由律俳句の

境界についての論争など、自由律俳句の理論づけと実践を

精力的におこなった。著書は二〇〇余に及ぶ。

荻原井泉水
(八八四—一九七六)



荻原井泉水



種田山頭火



栗林一石路

●第一七巻第二号 一九二八昭和三年三月

荻原井泉水

芭蕉の句の中より

香春のほとり

木村緑平

空が美しい夕べの木があちこち
 晴れて冬日の志賀から浪立つて來るこの岸
 柿干す夕日香春をまとも
 日に短い木の根に出る
 隣へも少し坂の根にある草枯れ
 それにしては月が遅い松の木
 金受日の鳥鳴く山が晴れてある
 落葉ぬれてある赤い葉も
 霜どけの照るでもない刈田牛入れてある

私

種田山頭火

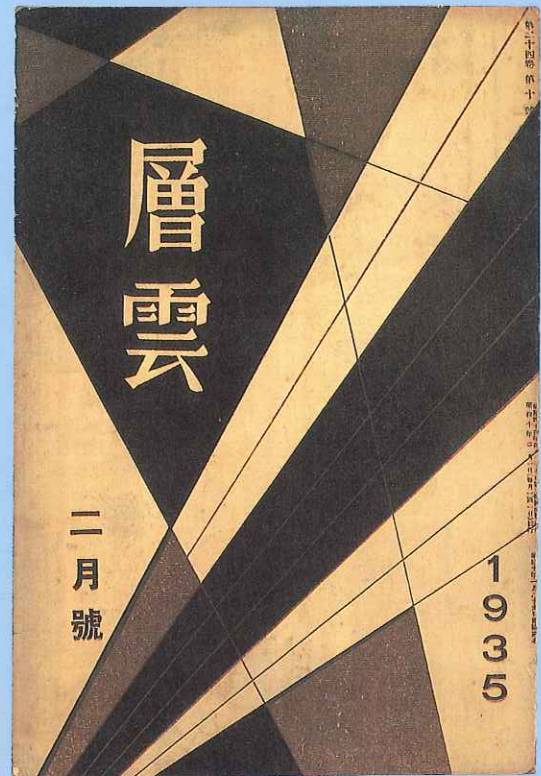
どうしようもないわたしが歩いてゐる
 働らいてても食へない寝言だ
 しぐらゐる土を踏みしめてゆく

「今日は親しらず、子しらず、犬も、一間隔て面の方に、若き女の聲、二所の遊女成し。伊勢参宮するとて、此やる也、白浪のよする汀に身をはふらしと物云を、ききく寝入て、あした見へがくれにも御跡をしたひ侍らん、は侍れども、我々は所々にてとまる出つゝ、哀さしばかりやまざりけらし月。

中に此遊女の一節を見出す事は、冬枯甚だ面白い。しかも、色彩といつても節はあはれな、しみくとした感じ、で不知、子不知は断崖の下の渚を行く道

●内容見本 第一九巻第一〇号 一九三〇昭和五年二月

●一九三五(昭和一〇)年二月号



●表示価格は、全て税別

不二出版(株)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-2-12
電話 03(3381)2443
フアクシミリ 03(3381)2446
振替 001600294084

層雲

第1期 全50巻
〔復刻版概要〕

〔体裁〕
A5判 上製クロス装 総二万ページ

〔挿定価〕
九〇万円十税

第一一回～第二〇回配本 各九万円十税

〔配本〕
全二〇回配本 一九九九年九月～二〇〇二年九月

●配本 ●復刻版巻数 ●原本巻数/原本発行年月

| | | |
|------|-------------------------|----------------|
| 第11回 | 第48～52巻(第17巻1号～第18巻8号) | 昭和2年5月～3年12月 |
| 第12回 | 第53～57巻(第18巻9号～第20巻4号) | 昭和4年1月～5年8月 |
| 第13回 | 第58～62巻(第20巻5号～第21巻12号) | 昭和5年9月～7年4月 |
| 第14回 | 第63～67巻(第22巻1号～第23巻8号) | 昭和7年5月～8年12月 |
| 第15回 | 第68～72巻(第23巻9号～第25巻4号) | 昭和9年1月～10年8月 |
| 第16回 | 第73～77巻(第25巻5号～第26巻12号) | 昭和10年9月～12年4月 |
| 第17回 | 第78～82巻(第27巻1号～第28巻8号) | 昭和12年5月～13年12月 |
| 第18回 | 第83～87巻(第28巻9号～第30巻4号) | 昭和14年1月～15年8月 |
| 第19回 | 第88～92巻(第30巻5号～第31巻12号) | 昭和15年9月～17年4月 |
| 第20回 | 第93～97巻(第32巻1号～第33巻12号) | 昭和17年5月～19年4月 |

●配本年月 ●定価

| | | | |
|---------|-------|-------------------|--------|
| 一九九九年九月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4785-0 | 九九年度 |
| 二〇〇〇年六月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4791-5 | 一八七年度 |
| 二〇〇〇年六月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4797-4 | 二〇〇〇年度 |
| 二〇〇〇年六月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4803-2 | 二七万年度 |
| 二〇〇一年一月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4809-1 | 二〇〇一年度 |
| 二〇〇一年六月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4815-6 | 二七万年度 |
| 二〇〇二年一月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4821-0 | 二七万年度 |
| 二〇〇二年六月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4827-X | 二七万年度 |
| 二〇〇二年九月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4833-4 | 二〇〇二年度 |
| 二〇〇二年九月 | 九万円十税 | ISBN4-8350-4839-3 | 一八七年度 |

●年度別挿定価

挿定価 九〇万円十税

